

水源禪師法話集 15

(2012年9月22日 東京法話会)

2014年10月2日

一乗会



目次

水源禪師法話.....	1
冬の時代.....	1
西洋哲学.....	3
アナパナ（入出息念）.....	4
カイラス山.....	6
十二縁起.....	9
方便.....	15
色即是空.....	18

水源禪師法話

冬の時代

1年ごとにだんだん世界が平和になって、素晴らしい世の中になることを私も心から願っていますけれど、2009年かな、最初に私が観た方向で、事が止まらず進んでいますけれども、それは私がね、今、春のような世界にして、すぐに弥勒菩薩が、弥勒仏陀が出てきて、すべて涅槃に行ければよいのだけれども、今やっぱり冬の時代に向かって、地球自体が今、冬の方向に走って、「それなら全く未来がないのか」と、そうではないのです。冬の中にも小春日和という素晴らしい時間帯もあるし、春でも暴風が吹きまくって竜巻を起こしたり、水害を起こしたり、真冬でも-20℃、-30℃の朝早い、凍るような道路を歩いたら寒いくらいだろうな、と思うかも知りませんが、その中でも燦々（さんさん）と太陽の光がそそぎ、真っ青な空の下に朝一番に光り輝くダイヤモンドダストというんですか。このような、まるで映画でも見ることができない、素晴らしい情景を示してくれます。

たしかに、物の見方、どういうふうにあるか、ということが一番大切だと思います。ですから、台風でもわざわざそれを見に行く、楽しみに行くという人もいますからね（笑）。ですから、どんなときでも、自分が平安になっていれば、大平安の世界でいれば、それこそ全宇宙がその力で包むことができますからね。自分がそういうふうにならなければ、その空間自体が、全宇宙が、その中にすっぽり入るといった状況が起こりますから、そういうことで、まず自分がその真理に触れるという方向が大切だと思います。ですから「あんまり騒がずに」と言っても、いつの世も手を変え品を変え、歴史のひもを解けば、こういう状況が歴史的に起きます。そこから始めて、今日は一番大切な「一体、お釈迦様が何を観て何を語ろうとしているのか」「何を残していったのか」という最も大切な課題をお話したいと思います。

その前に、奇しくもスリランカから帰ってきて、菩提樹ですね、お釈迦様が悟りを開いた菩提樹。その原木のところで手を合わせてもらいましたが、そのそばには皆さん行けるんですよ。ところが、原木のすぐそばに入ることは、普通の人にはめったに許可されないと思います。私はたまたまそういう幸縁を得て、その前で手を合わせることができましたけれど、その根元に落ちた葉もちょっと拾って、日本に一つ置いてあります。まさに「神の木」と言うしか言いようのない、木でありながら、そうとしか思えないくらい、2500年たった後で。

というのは、この原木はお釈迦様が坐って、キング・アショーカ（アショーカ王）¹の王女様がそれを枝分けして植え付けたのが、スリランカにあって、2500年の生命体でなんです、それからずーっと。奇しくも、その枝分けした木がスリランカのマハーボディ・ソサエティにありまして、その種が今ここにあります。みなさんにお分けしましたけれども、このように咲きますから、生えてきますから、すごいもので。カナダでも鉢に植えて盆栽みたいにして室内で育てて、やはりいいものです。菩提樹にも、いつでも何かいのちをくれるというか、そういう「物は物で関係ない」と、皆さんは思っているでしょうけれども、「物がないと仏は出てこない」のです。「体がなくては仏になれない」わけなんです。

そのことを達磨大師様²が今から1500年前ですね、524年（525年の説もありますけれども）『達摩多羅禅経』ということに書かれています。この時代はやっぱり「アナパナ」³（入出息念）。呼吸、鼻から吸って鼻から出す。そして、ずーっと禅定を深めていって自分の死を観つめるとか、「不浄観」⁴とか、いろんな行をさせて。力が上がってきたときに「ニミッタ」（丹光、禅相）を要求します。ニミッタの力をもって、今度は「四界分別」⁵に入っていきます。

だから、弘法大師様⁶（774-835）も「アナパナやっているから、今は天皇陛下が呼びに来ても、私はアナパナをやっていますから行けません。こっちの方が大事です」と、そういう逸話が真言宗の泉涌寺派法楽寺というところから掲載されて載っていますけれど⁷、アナパナ、やっぱりボディーダルマ（菩提達磨）のことが載って、やっぱりもうこの時代になったら、日本ではもうほとんどが経典仏教からの解説だから、もう本質が完全に見失われてしまっています、完全に。ということが今、日本の仏教界の、ちょっとした本でも結局10,500円とか（笑）、それで書かれている内容を見たら到底、不可能である。書いている本人も「経典から経典に移し替えている」というのが現状です。

¹ 古代インド、マウリヤ朝第3代の王。在位は前268年頃 - 前232年頃。生没年不詳。パーリ語仏典ではAsoka。漢訳仏典では阿育と音写、無憂と意訳。父はビンドゥサーラ。父王の死後、兄弟と争って王位を継承した。王の碑文によれば、在位第8年にインド半島北東部のカリンガ国を征服し、このときの数十万に及ぶ殺戮がきっかけとなって仏教に帰依した。これよりダンマ（法）に基づく政治を実施し、仏教教団を手厚く保護した。

² 菩提達磨（ボーディダルマ）：中国禅宗の開祖。出自に諸説あるが、南インドのバラモン出身で、6世紀初め中国に渡って各地で禅を広めた。嵩山少林寺で面壁九年の坐禅を修行して「壁観（壁に向かって坐禅内観すること）婆羅門」と呼ばれたといわれている。

³ anāpāna : āna（アーナ）は息を吸うこと、pāna（パーナ）は息を吐くこと。アナパナサティ、安般念（安那般那念）などともいう。第四禅定に至るまでの集中力を育てるのに非常に効果的な瞑想法。

⁴ 不浄観：腐敗して膨れ上がった死体の姿を観て瞑想する。初禅まで行ける。

⁵ 四界分別観：体の要素である地、水、火、風の四大について、その働きを観る。

⁶ 空海：讃岐（香川県）出身の平安初期の僧で、真言宗の開祖。804年に入唐して、恵果和上から胎藏界と金剛界を両翼とする密教を受法し、2年後に帰国して開宗し、高野山金剛峯寺と東寺を道場として真言の教えを弘めた。

⁷ 真言宗泉涌寺派大本山法楽寺HPに「弘法大師空海などは、高野山にて安般念に没頭中であることを理由に、天皇からの京への招待を無碍に断っている手紙が残っています」と述べられている。

西洋哲学

ということは、西洋の「分析学」から発しているのですけれども、「分析学」というのは結局「訓練において分析しながら物を見ていく」と。遠いソクラテス（前469頃-前399）とか、そういう時代には「本当に物を見たときには、そのまま真理が見える」という、社会経済もすべて予見できて「いかに社会が幸せに生きるか」という力をもった学問だったのですね、「哲学」というのは。だから、そこからアリストテレス（前384-前322）、プラトン（前427-前347）、プラトンの「政治学」。それで今現在に来て、ずーっと引き続いて、結局「医学」もすべて統一した「哲学」から枝分かれしたのが、現代の西洋学問です。

ただし西洋も4世紀あたりまではそういう風潮がありました。今度は逆にカソリズムが非常に強くなって、真理を曲げはじめましたね。でも、1000年の暗黒時代が発生してルネサンス時代、ガリレオ¹（1564-1642）とか、そこから真理をいち早く見始めたわけなんです。だから、地球が丸い太陽の周りを回っているというのは、ヒュパティア（370?-415）というアレクサンドリアの女性の数学者、この方は偉大な方で、「哲学」も。この方の弟子がその後、ギリシャ哲学とかサイエンス（科学）を受け継いで、今の現代のイギリス、アメリカということになっています。

それで、やっぱり素晴らしいことは、私が合宿で「実はマリア・マグダレナ²（Maria Magdalena）がキリスト様（紀元前4年頃-紀元後28年頃）の一番の弟子で、女性で、夜も同じ部屋に泊まって、いつも一緒にいた」と。ハーバード大学の古文書を研究している、キリスト教専門のカレン・キング教授がローマで4日前（2012年9月18日）に発表されて、その古文書が発見されました³。「イエスが言うには〈私の妻〉」と、はっきりその文体が書かれている。

聖書というのは、死んだ後にすぐ書かれたものではないはずで。一番早くても120年、150年あとに書かれたもの。だから200年。だから、その4AD（紀元4世紀）の文体というのは非常に初期の状態で「コプト」。「コプト」というのはエジプト、エジプトキリスト教ということで、エルサレムでも協会の一番上に座る「上座」ですね。そういうふうに「いや、キリストは独身で結婚してないし」ということですが、今度、妻がある文献が発見されました。というふうに、宗教家としては他の宗教、そこまで突っ込んで、つい4日前です、驚くようなことを、次から次と合宿で皆さんに言って頭おかしくなりそうだけど（笑）。その一環、マリア・マグダレナのことが現実としてBBC（英国放送協会）ニュースで世界にも発信され

¹ Galileo Galilei：イタリアの物理学者、天文学者、哲学者。パドヴァ大学教授。その業績から「天文学の父」と称され、ロジャー・ベーコンとともに科学的手法の開拓者の一人としても知られる。

² マグダラのマリア：新約聖書中の福音書に登場する、イエスに従った女性。「マリヤ・マグダレナ」とも転写される。

³ 紀元4世紀のパピルスの断片に古代エジプトのコプト語で「イエスは彼らに言った、私の妻は」と書かれていることが分かったので、ハーバード神学大学院のカレン・キング教授（神学）が「イエスが妻に言及していることを初めて示しているものだ」と、2012年9月18日、ローマで開かれたコプト語研究国際学会で発表した。

て、ハーバード大学のそういうところの研究する学者ですから、やはり私が言うことよりもずっと権威がありますね。それもローマの学会で発表しているから。

というふうに、他の宗教も含めて仏教の方（かた）は見る必要があるし、また先も見越してちゃんと教えていかなければ、というのが仏教の本質です。哲学は一步下がってもいいんですけど、仏教になれば先を見ますから、科学から数学から。この前の数学の世界もぶっ続けて話しましたけれど、科学でもこっだけ遅くて、これが定説化するのに、あと50年、100年、200年たつかもしいないし、そしたら200年も生きていられませんから。だから、現状はこういう状態なんです。

アナパナ（入出息念）

南伝のテーラワーダ（南伝）と北伝は違うと、私が今回、仏牙舍利（をまつる）靈光寺（という）中国の北京にある所に行くと、驚くことにアナパナが全部、書いてあるのです。教科を見たら、ほとんどパオでやった教科の手段を取っています。日本でも真言で弘法大師様は「アナパナを今やっているから、天皇陛下に会えない」と、これで全く私が『般若心経秘鍵』で「私は7歳のときに筵（むしろ）に座らされて、本当に親しくお釈迦様から『般若心経』を教えてもらったけれども、まだまだその域にありません！」と、やー、私はそれを見て最初、これはどういうことなのか、自分の過去を観られる力があるのか？ どうなのか？ まあ、この文献の一部で「今、忙しいからアナパナをやっているから、その時間がありません」と。

アナパナの最終段階に入ると「十二縁起」といって自分の過去を観なきゃいけない。また、そのパオで教えられても、これ半分しかないけど、ここの中に入っていない。後の中間あたりで過去を観ます。だから、日本に伝わっている『智慧の光』とか『如実知見』が、これですけど、ここから出ていますけれども、これは半分くらいのインフォメーション（情報）しかありません。だから、よくよく本だけ読んで分かるということは気を付けてください。それで、やっぱりやっている教科は同じことをやっています。だから、そのテーラワーダでもその達磨禅でも、やらざるを得ないところがあったわけなんだけれども、「じゃあ今どうして、今の禅はこういうことを皆しないのか」、私もこの教科は教わっていない。六祖大師（慧能）のときに、彼は『金剛般若経』を聞いてすぐ悟りに入ったわけなんです。空の体験を教えたわけなんですね。ですから、禅では空を直接、目指します。テーラワーダでも最終段階では、どうしても空を通過しないとイケません。その後での話で、その涅槃のことがわかりますね、涅槃。

ま、そういうことで、達磨禅の最終段階が結局「十二縁起」の教科に入っていきます。十二縁起の教科がやはりここにちゃんと入っています。だから、この前、ディーパンカラ（・サヤレー）さんの「十二縁起」を読んだけれども、ま、最初のところですね、最初のところを説明しているわけなんですね。実際はそれを細かく観ないといけない。だから、弘法大師様が「今、急がしいから」と、非常に時間がかかります。そこで私が悩んだのは「一体この知識をこの状態にどうしてもってけるか」ということで悩んだのだけれども、幸いカナダでお釈迦様が言いました。「『清浄道論』でいく方と、あの方便を使う二方によって人を助

けることができる」と、これで、カナダで方便をもって過去を観せることに成功して、今回の合宿でも、この方便をもって観せることができました。結局だから、弘法大師様もやっぱり過去をはっきり観て、納得して「まだ忙しい」と言うのは、「四界分別」の細かいルーパ¹の世界と自分の過去と現在を結び付けなきゃいけないんですね。これは至難の技です、先生がいないときは。だから、「まだ私はその域にあらず」と言うのは、先生いないと独学でやらないといけないし。その教科書が、こういう教科書ですから、それはすごく苦労したと思いますよ。だから、できることは、お釈迦様の時代にさかのぼって、そこからの知識で研鑽するしかないわけなんです。「過去を観る」ということは本当に映画を見るように、そこから埋もれた知識も取れます、忘れたことも、過去こうこうこうこうだ、そこまではっきり映画のようにみなさん持っているわけなのです。だから、その西洋方では「未来もないし過去もない」と。現在、私のお釈迦様の手法で過去を観せたことによって、この方は完全に救われたわけなんです。

なぜかといったら、第一線で働いているお医者さんでしょ、キリストもしっかり信じているけど、ここで「完全に破れた」というのは「違う」と、また、それにまた「ジーザスが奥さんを持っている」と。「宗教家は独身でなきゃダメだ」という、そういうふうにはなっているんだけど、結局、ガンディーにしる、ネルソン・マンデラにしる、離婚もすれば結婚もするし。そういう社会体制において認められる社会状況であれば、そういうことは二の次であってね、いつの時代か、すり替えられて神格化してしまうんですね。人間のできないことをやって、初めて「だからこの人は悟っただろう」、それとは全く関係ないみたいです。

だから、この西洋哲学の根底は大変なことになっていくでしょうね。結局、オッペンハイマーとかデカルトとか、そういう人は「過去がないのがおかしい」と、今から200年、300年前に予言しているし、「あるはずだ！」と。それが今でも日本の宗教家が「何もないのだ」と（笑）、時代はこういう方が本当に「無」の本質を知ったときに言えるけれども、言わずに「無とは何か」と、誰も証明できないんだから、数学者でも数学というのとは一番「 $1 + 1 =$ 」というその原理も分からないけれども、それで説明する、今度は哲学よりもシャープに今のコンピュータの世界、ナノの世界、追跡しているでしょ？ そういう人でも分からないのに「無だ」「無だ」なんて、そうであるかもわからないけれども、実は「無」と「空」は違うんです。

だから、一般の社会の人がこう病にかかるとは仕方がない。こういう方々が、一般の方のお世話になって、国から補助金をもらって、そのお金で大学の先生をやって、そうして研究している方が、こういうことを言い始めたら、本当に税金を使ってやっているけど、文献だけでも「実際とは違う、これは間違っていることだ」ということに気が付かずに、どんどんやっている、これはやっぱり改革しなければいけないんじゃないですか？ というのは結局、皆さんが一生懸命、働いて、まじめに働いて、身を削りながら働いて納めた社会をよくしようとした血税が結局、福島、それで17兆円もお金を集めたら、そのお金を全国の道路とかに、

¹ rūpa (色) : 変化する物質。

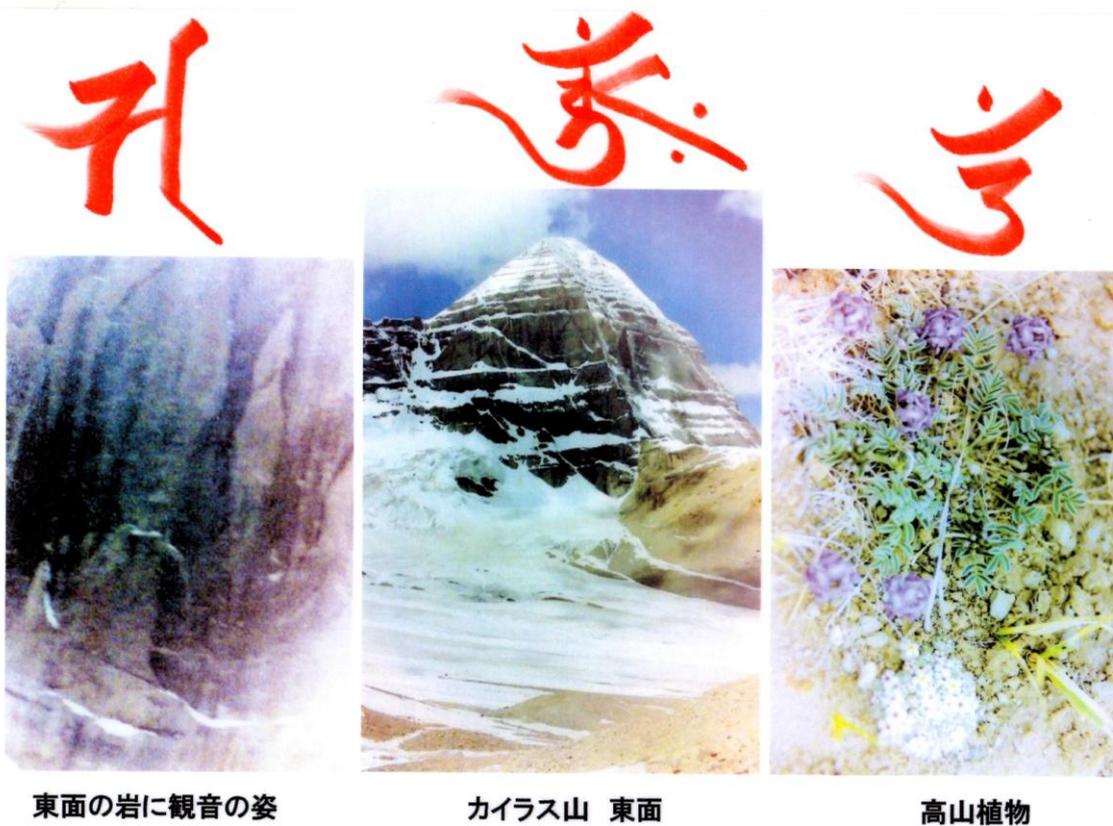
いろんなどころにばらまいて、福島じゃなく、その三陸沖の震災の方に行かないと。結局、現場から完全に離れた、その文学の世界というのかな、ということが非常に恐ろしい。

やっぱり仏教でもそういう事態が、やっぱり見たら心から、これは人間のこういう悪い癖というかね、お釈迦様は「これをやめなさい。やめなさい。やめときなさい」と言われた。

「しっかり自分で物事を観て、自分自身で、体で真理を悟ってください」と。「ルーパ（色）即ブツダ（仏陀）、仏法」といって、仮語で言えば「色即仏」と書いて、全くそのとおり。

「識」、意識の識ですね。ナーマ¹もね、ルーパがなければナーマは発生しません。だから「精神主義、精神主義」と、これだけ言うのは、まーほとんど気がおかしくなることをやるしかないですね。物質から離れてしまうから。やっぱり身心とも物質と精神が一致したときに、まさにそこにバランスが取れて平安な状態が生まれる。平安な状態が生まれるということは幸せのエネルギーに入っていきます。もうこれは自分自身で体験するしかないわけなんです。

カイラス山



忍野合宿（2014年）での配布資料

¹ nāma (名) : 本来「向く」という意味で、概念に向かって働く精神的機能のこと。心と心所を合わせたもの。

なぜこの（カイラス山の）写真を撮ったかという、やっぱり日本でいえば「お寺参り」みたいなもので、あっちのお寺、こっちのお寺と、世界のお寺をあれこれ回り歩いていく、その過程の中で、カイラス山というところを回ったわけなのです。これも、ここの山に行くのに7年かかりました。最初、東の空に不可思議な現象を観て「これは何か？」と。2年かかって、その存在がカイラス山と。では、どうしてそこに行けるかということで、ありとあらゆる手を尽くして探したんだけど、情報がほとんどないわけなんですね。それで、やっと2000・・・ちょうど今から2000年かな、6年前、だから今から2006年ですね、そのときにも情報はほとんどなくて、奇跡的にカイラス山に向かいました。やっぱりインドの方は「その山に行ければ、もう天国、間違いなし！」と。「その前の湖で体を洗えば、一切の罪が消えて、結局、神から救われる、天国に必ずや生まれる！」と。チベットの方は「これは大日如来である」と。「仏そのものの化身である」ということで、「すごい功名があるだろう」と。まーそれは別として、そういう現象を観て、回らせてもらって、いまだに最も力を感じたのはこの山ですね。それで、その奥の山を回ったときに、本当は中に入っただけなんです！ 外回り、外回りだけで回るのが正式で、中は13回まわったら13回目は入ってもよい。そうじゃなきゃ必ずや命を落すだろう。

そして、私がこの観音様を撮ったのは東の面の内にあるわけなんです。だから、人は見られない、写真では。右側の高山植物もその入る前の写真、入り口のところで。結局「金剛華菩薩」（こんごうけぼさつ）という華（はな）菩薩という菩薩がいます。そういうことで、「観音菩薩」と「金剛華菩薩」、真ん中が「大日如来」ということで、こういうふうに乗せました。それで、やっぱりここに、これは北面ですけれども、東の面に入っただけで、出るには6200mの峠を超えなきゃいけない。勾配がこれくらいになってある、一步上がるのに1分から2分かかります。息が「はっ」と上がるので、そんなに簡単には登っていけない。それでまた2、3歩上がったらず、ザ、ザ、ザー」と落ちるくらい、この砂利みたいになってますね。それで、峠6200mを回って、これからあっちの峠に行くときには、もうアイスバーン（路面凍結）がこうなっています。一步、踏み外せば1000m谷底、「ザー」と止まることなしに。

そういうことで、奇しくもそういうところを通って、その谷を超えて、あっちのそういう高台に到達したときに雪が「ダーッ！！」と降ってきましたね。まー歩いているときは天の神が空を押さえてくれるのがはっきりと分かります、精神的に。だから途中でね、雪が「ポーッ」と降ったら命を落とします。中に入って登っているときも、雪が落ちたら死にます。でも、それからちょうどその年が私の生まれ年。だから、その年に1回まわれば12回まわったことになるから、結局、13回目でその山の掟を破らなかった。だから神が呼んでくれたわけなんですね。私は入る気もなかったけども、「来なさい！来なさい！」と、どんどんこどもこ！もう後ずさりできない状態。ただ上がるだけ。ただ上がっていただく。そのときに撮った写真がカイラス山の、この「観音様」の写真と、その山の入り口の「高山植物」が写っています。この北面はね、外から見られます。これを超えて中に入れば、下から撮れますけど、この北面は外から撮って、この東の面のときだけ晴れていました。

そういう写真で、なぜこういうふうになったかと言えば、さっきやはり真理を、真理ですね、真理を求めるために、私の体を使って、その実体験ですね。そのなんて言うかな、この大宇宙的なエネルギーのバイブレーションというか、そういう、ま、説明はできないけれど、そういうことで、その後ずーっとインドを回って、スリランカを回って、結局ミャンマーに行ったらアナパナ（入出息念）やったら、すっと終わってしまっただけ。やっぱりそういうご褒美をもらったような気がします。それで、皆さんに「私のようなことしなさい」とは絶対に言いません。もう本当に命を落とすような、もう宿も何もない、その山を3日まわって、1回3周しましたけど、1周57km、バルカン（小村の名）といえ、その名前はちゃんとしているけれども、宿が三つあるかないか、食堂も何もない。6時間くらいまわって、やっとトラック1台走る。そういう状態。ロマンと言えば大ロマンで。ま、今こうして、そういうことで得た体験の中からの。経典を読んだ場合には、やっぱり今ここではっきり皆さんに言ったように「体験を通して読む経典と、ただ読む経典とは多岐に違いがありますから、気を付けて下さい」と。特に、家を建てる時もね、現場を見ないで設計図だけでも建ちますけどもね。設計図が合っているからと「そのとおりに建てなさい」と言ったら、潰れるかもしれません。

ということですから、実は簡単なことです。毎日5分か10分でも静かに坐る時間を持てればいいし。それがなければ、布団の中で寝ながら時計を見ながらすると、そういうことをお釈迦様が言っています。つまり「寝てもできる」と。立ってもできます。歩いてもできます。座ってもできます。やっぱりこういやいつもこういうことで、息を見つめなさい。「どういうふうに息をやったか」、それを心で観てください。心でどこを観るか？ 体に空気がいっぱい入っているか、入っていないか、腹がふくらみ縮んだ。これがマハシのカーヤヌパサナー（身随観）。ヴェーダヌパサナー（受随観）はゴエンカの感じ方。全体、体の感じ方。「心をじっと観る」ということが結局、禅の「心即是仏」で、ずーと心を観ていきます（チッタヌパサナー〈心随観〉）。ダンマヌパサナー（法随観）は結局、ニミッタ（丹光、禅相）を使って心の仕組みを観ていきます、サンカーラ（行、形成作用）。「ダーッ！！」と。この「サティパッターナ」（四念処）によって、必ずやあなた方はアナガミ（不還果）、アラハト（阿羅漢）、アナガミに到達するでしょう、ということが書いています。これ間違いのない体験でそうになっています。それで、日本も結局『サティパッターナ』を読んでみたら、やっぱりここでは無理があります。これだけでは。結局、文献経典であるということで、誰かが事細かに指導していかなければ到達できない。

この今、ディーパンカラ（・サヤレー）さん、クムダ・セヤドーでも、この本は全部、使わないんですよ。ポイントがあるんです。ここ、ここ、ここ。これ全部やったら頭おかしくなってしまうのでできないんです！まー「言語」、そのディーパンカラさん、クムダさんにしろ、どういうふうに教えているか分からないし、結局「言語」じゃないから。結局、言葉を通してしまうもんだから。ちょっと彼らの文献があれば、すぐ分かるんだけど、あまり文献がないし。彼らがどういうふうな手法でやっているか分からないけれども、言葉の障害が非常にあります。

私が一番苦しんだのはミャンマー英語。ミャンマー英語というのは、ブリティッシュインディアンイングリッシュなのです。ブリティッシュインディアンイングリッシュ。イングリッシュイングリッシュとも違います。また、アメリカンイングリッシュとも違います。オーストラリアンイングリッシュともまた違う。だから、微妙に違うところをどこで補足したかというふうに言いますとね、やっぱりマレーシアから来て行を終えた方と、それからミャンマーで行を終えた方、二人がピタッと横に付いてサポートしてくれたから。その微妙な違いと中国版のと、それからその英語版ですね、日本語版はありましたけど、ちょっとしかなくて、二つ計算しながら、三つ計算しながら、結局ミャンマーの方、マレーシアの実態はどうなっているか、ということ報告してくれるもんだから。「ああーここだ！」ということが分かる。でなければ、分かったつもりで、そこでとどまることがほとんどです。それで、いよいよ今度、本題に入ります。

十二縁起

お釈迦様が結局、何を観たかということがこうですね。

Aneka jāti saṃsāraṃ sandhāvissaṃ anibbisam

アネーカ ジャーティ サンサーラン サンダーヴィッサン アニッピサン

(『ダンマパダ』154)

つまり、私は今まで時も数えられないくらい、分からない位、てんてんてんと「生まれては死に」を繰り返してきたと。

Gahakāraṃ gavesanto dukkhā jāti punappunam

ガハカーラカン ガヴェーサントー ドウッカー ジャーティ プナップナン (同)

それで、どうして、こうしてサンサーラ、輪廻を繰り返しているその本質を今は、私ははっきりと観たと。

'Gahakāra, diṭṭosi' puna geham nakāhasi,

ガハカーラカ、ディットーシ プナ ゲーハン ナ カーハシ (同)

こういうふうに、このサンサーラ（輪廻）を変え、続けなくてもいい、ということをはっきり観たと。

Sabbā te phāsukā bhaggā, gahakūṭam visaṅkhatam

サッパー テー パースカー バッガー ガハクータン ヴィサンキタン (同)

自分を作っているこれを破る方法が分かりました。

visaṅkhāragatam cittam

ヴィサンカーラ ガタン チッタン (同)

というのは、私は、はっきり心の中に、それを作り上げるということを観ました。こうです。

「観自在菩薩行深」の「行」、「観」（ヴィパッサナ）、

visaṅkhāragatam

ヴィサンカーラ ガタン

心の中でサンカーラは行列、「受想行識」をはっきり心の中で観た。

taṇhānaṃ khayamajjhagā

(同)

タンハーナン カヤ マツジャガー

この執着。「タンハー」(渴愛)は執着です。権力に対する執着。お金に対する執着。「自分のものだ」という執着心。だから、人間は博打とか薬物とか何にでも執着してしまいます。といういうことを私は観たと。それをずーっと悟った後で、こういうことを言っているわけなんですね。

日本語ではこうですね。

【原文】

無上甚深微妙法 (むじょうじんじん みみょうほう)
百千万劫難遭遇 (ひゃくせんまんごう なんそうごう)
我今見聞得受持 (がこんけんもん とくじゅじ)
願解如來真實義 (がんげによらい)

【訓読文】

無上甚深微妙の法は、
百千万劫にも遭い遇うこと難し。
我れ今見聞し受持することを得たり。
願わくは如來の真實義を解せん。

このことなんです。「願解」、ヴィパッサナー(観)でちゃんと観たと。「真實」、サンカーラを観たと。というふうに、お釈迦様は言ったわけだ。では、どういうふうに観たか。

まずその晩、私は木の下に坐った。魔の王女が3人現れて誘惑とか、そこは外して、実際に何を観たか、そこに坐って。まず坐ったら、ワーンとヴィパッサナーに入っていきます。禪定に入っていきますから、そのアナパナ(入出息念)で第四禪定に入る。達磨禪。やっぱりパオでも第四禪定に入って。それが一番安定するから。第八禪定までいきますけど、ずーっと全部やらせますけど。それで坐ったときに映像が観える。ダダダダダダダダーッと！十二縁起に入る前に。ある人は大きな方。ある人はおぼけみみたいな変なとか、ダーッと観るわけなんですよ。それに、

【原文】

Iti imasmim sati idaṃ hoti, (此有故彼有、)
imassuppādā idaṃ uppajjati, (此生故彼生、)
—yadidaṃ— (—亦即—)
avijjāpaccayā saṅkhārā, (縁於無明、行生起)
saṅkhārapaccayā viññānaṃ, (縁於行、識生起)
viññānapaccayā nāmarūpaṃ, (縁於識、名色生起)
nāmarūpapaccayā saḷāyatanāṃ, (縁於名色、六処生起)
saḷāyatanapaccayā phasso, (縁於六処、触生起)
phassapaccayā vedanā, (縁於触、受生起)
vedanāpaccayā taṇhā, (縁於受、愛生起)
taṇhāpaccayā upādānaṃ, (縁於愛、取生起)

upādānapaccayā bhavo, (縁於取、有生起)
bhavapaccayā jāti, (縁於有、生生起)
jātipaccayā jarāmaṇaṃ (縁於生、老・死・)
soka-parideva-dukkha- domanassupāyāsā (愁・悲・苦・憂・悩)
sambhavanti- evametassa kevalassa (生起。如是、集)
dukkhakkhandhassa samudayo hoti. (起這調堆苦。)
yadā have pātubhavanti dhammā, (正当諸法顯現於精進)
ātāpino jhāyato brāhmaṇassa; (禪修的清淨梵行者、)
athassa kaṅkhā vapayanti sabbā; (他的疑惑全消失。)
yato pajānāti sahetudhammaṃ. (因為、他慧知有因滅。)¹

【解説】

Iti imasmim sati idaṃ hoti, (此有故彼有、)
imassuppādā idaṃ uppajjati, (此生故彼生、)

あれこれ生まれ、ダ・ダ・ダ・ダ・ダ・ダ・ダーッと観えるわけなんですよ。それがずーっと続くわけですよ。それでずーと観ていったと、さっき、

visaṅkhāragataṃ cittaṃ (ヴィサンカーラ ガタン チッタン)

サンカーラ (行、形成作用)、十二縁起、

avijjāpaccayā saṅkhārā, (縁於無明、行生起)

「行」ですね。「行」っていうのはサンカーラ、「行深」の「行」。お釈迦様、「行」、「観自在菩薩」、お釈迦様が深くサンカーラを観たと。

avijjāpaccayā saṅkhārā, (縁於無明、行生起)

saṅkhārapaccayā viññāṇaṃ, (縁於行、識生起)

こういうふうなことにより、心のダーッと動きが観えますから。それが「チッタ」、意識で分かりますと。

viññāṇapaccayā nāmarūpaṃ, (縁於識、名色生起)

これは、こういうフォーメーションは一体何なのか？ と言ったら、ナーマ・ルーパ(心と体)、色が、そのルーパにくっ付いていると。ナーマ自体では存在できません。物質についてハダヤ(心基)という物質のところになります。そこにくっ付いてナーマ・ルーパになります。

nāmarūpapaccayā saḷāyatanāṃ, (縁於名色、六処生起)

そのナーマ・ルーパが発生する。そういうことが発生しますから、

saḷāyatanāṃ (六処生起)

六処が発生する。六処とは何か。これです。眼で見る、このスペースと空間帯。聞く、耳、耳から入る、このスペースと空間帯。目とここは違いますよ。完全に違う空間帯です。それからにおい。においのスペースと空間帯は全く別なスペース帯です。それぞれ完全に独立し

¹ 水源禅師一行が2011年10月、台湾仏教見学旅行で立ち寄られた、パオ僧院の南伝寺院浄楽禅寺で頂いた『巴利課誦』『仏陀開悟後的省察』縁起次第(前夜)を引用。
『水源禅師法話集』16巻・14頁以下参照。

ているものです。それから味、舌、それから体の触の「吾」は「五」を書いて「口」でしょ。この「吾」のことです。それで最後、「六処」、「サラー」というのは「ヤタナーン」、六です。シー？ここのナーマに全部、収束されます。これがすべて。ただ私たちはその音も、それからにおいも、それからこの「識」も一緒にスペース帯だと思っているけども、心の中で収束され、一体になって反応しているだけであって、それ自体は全く独立したエネルギー、エネルギー帯のスペースである、ということをお分かりください。それを2500年前にはっきりお釈迦様が説明しているわけなんです。

だから、皆さん「愛、愛」と言うでしょ。「愛」もまたそのスペースとエネルギー帯があります。「愛」はすべてを包むという。まあすべてを包むだけ、すべてがすべて、眼であろうと、どういうエネルギー帯も、すべてを包むようになっていきますけれども、「愛」も「メッタ」（慈悲）も、やっぱりそのスペースという、完全に独立したエネルギー帯のスペース。また次に結局、「慈悲」、慈悲の世界もあります。ベートーヴェンの「歓喜」、またその世界もあります。つまり、エネルギー帯のスペース帯、だから、実にこの宇宙は想像を絶するくらい精密にできています。そういうことで、ちょっと光の速さと心の動きとかスペースの、実際に私たちのここは何の世界とか、タイムの事情を合宿で説明しましたが、非常にまた難しくなりますので、ここではさらっと、そういうふうに、

saḷāyatanapaccayā phasso, （縁於六処、触生起）

だから、そっから入ってきて、今度、本当にそれが組み合わさって、心で受け止められると、

phassapaccayā vedanā, （縁於触、受生起）

今度「感覚」。「おー、あー、彼は20年前に私にこんなことした」とか、そういうフィーリングが入ってくるわけですね、「彼はこういう30年前にいいことをしてくれた」とか、おいしいもの食べたとか、それが全部入っているということなんです。ただサンカーラというのは、ただ行列それではなく、一切のあなたがたの経験がこういうふうになっている。過去無量の時間帯から、そして、

vedanāpaccayā taṇhā, （縁於受、愛生起）

こういうふうな感覚があるから、「おーあいつが憎い」とか、「おー私はこの人を愛する」とか、それが「タンハー」（渴愛）、「私はおーこの人が憎い」ということで、その怨念が800年続けて今でも亡霊になって恨みをもっているわけなんです。亡霊というのは私たちの時間帯とは違いますからね。私は百年以上、彼らは千年、万年、800年、滅ぼされたその殿様が今でもこの日本のどっかで、もう怒りおかしくなっていますからね。他の生命体になっちゃったわけなんです。そういう死ぬときの「タンハー」というのは「執着」です。「ガーッと愛だけではありません、そういうこと誤解しないで、そういうことによって、

taṇhāpaccayā upādānm, （縁於愛、取生起）

新しい生命体が、結局、幽霊（餓鬼）だったわけですね。この方は、

upādānapaccayā bhavo, （縁於取、有生起）

そういうふうに幽霊の生命体と物質。だから幽霊でもね、血が出て痛いわけなんです。切れば。彼らの物質で悲鳴を上げますし。私たちでは通じない、通過してしまうけれど、また

彼らも全然違う物質体だから。天界もまた別、違う物質で、そのことも説明しますがけれども。そういうふうにして、そういうふうには、

bhavapaccayā jāti, (縁於有、生生起)

そういうふうには心が発生してしまうものだから、今度は「jāti」、命が発生すると。

jātipaccayā jarāmaṇaṃ (縁於生、老・死・)

命が発生して生きるから、必ずや死が訪れると。そういうことをずーっと過去無量に観て、結局それはね。なんといっても苦であったと。苦であるというのは、

soka-parideva-dukkha- domanassupāyāsā (愁・悲・苦・憂・悩)

sambhavanti- evametassa kevalassa (生起。如是、集)

dukkhakkhandhassa samudayo hoti. (起這調堆苦。)

それがウワーッといつでも、ある集積して悲しむ苦。だから苦であると、「苦集滅道」の「苦」であると、

yadā have pātubhavanti dhammā, (正当諸法顯現於精進)

こういうふうにはっきり観たと。

ātāpino jhāyato brāhmaṇassa; (禅修的清淨梵行者、)

athassa kaṅkhā vapayanti sabbā; (他的疑惑全消失。)

yato pajānāti sahetudhammaṃ. (因為、他慧知有因滅。)

って、こういう因縁をね、ずーとこの前後修行して、こうしてこれが消滅する、という智慧を觀ましたと、どういうふうにもまた観たかと、ずーっと、

【原文】

Iti imasmiṃ sati idaṃ na hoti, (此無故彼無、)

imassa nirodhā idaṃ nirujjhati, (此滅故彼滅、)

—yadidaṃ— (一亦即一)

avijjānirodhā saṅkhāraṇirodho, (無明滅故行滅)

saṅkhāraṇirodhā viññāṇanirodho, (行滅故識滅)

viññāṇanirodhā, nāmarūpanirodho, (識滅故名色滅)

nāmarūpanirodhā saḷāyatanaṇirodho, (名色滅故六處滅)

saḷāyatanaṇirodhā phassaṇirodho, (六處滅故觸滅)

phassaṇirodhā vedanānirodho, (觸滅故受滅)

vedanānirodhā taṇhānirodho, (受滅故愛滅)

taṇhānirodhā upādānaṇirodho, (愛滅故取滅)

upādānaṇirodhā bhavaṇirodho, (取滅故有滅)

bhavaṇirodhā jātinirodho, (有滅故生滅)

jātinirodhā jarāmaṇaṃ (生滅故老・死・)

soka-parideva-dukkha-domanassupāyāsā (愁・悲・苦・憂・悩)

nirujjhati-evametassa kevalassa (滅。如是、滅去)

dukkhakkhandhassa nirodho hoti. (這整堆苦。)

yadā have pātubhavanti dhammā, (正当諸法顯現於精進)

ātāpino jhāyato brāhmaṇassa; (禅修的清淨梵行者、)
athassa kaṅkhā vapayanti sabba; (他の疑惑全消失。)
yato khayam paccayānam vedī. (因為、他了知衆縁之滅尽)¹

【解説】

Iti imasmiṃ sati idaṃ na hoti, (此無故彼無、)
imassa nirodhā idaṃ nirujjhati, (此滅故彼滅、)

過去をこうして観ていくときに、それが消滅したら、これもまた消滅したと。あれが消滅したら、またこう消滅して、ダーッとこの人間が、そういうことをずーっと観たときに、

avijjānirodhā saṅkhāranirodho, (無明滅故行滅)

結局ね、その無明。自分の欲とか、そういう間違った考え方で生きてきたものが消えるから、そういう間違ったサンカーラ、作り上げることもまた消えると、

saṅkhāranirodhā viññānanirodho, (行滅故識滅)

結局そういうことでサンカーラが消えていくから。「おーあいつからまー20年前殺されて恨んだ」ということも消えてしまうと。大事なんですよ、これが死んだときに。恨みを持ったら恨みの中に入ってきますから。「おーあいつからいいこと貰った」、これはいいことです。まあ善いところに行くから。そうゆうことは感謝の。だから、そこで皆さんが一切の生きとし生けるものが、まあ菩薩であると見たときには必ずや、もはや菩薩界に入っていきますよ。ただ自分は菩薩じゃないけど、すべてが菩薩に見えたときには、そういう世代に入っていきます。まー、

viññānanirodha, nāmarūpanirodho, (識滅故名色滅)

結局こういうことで、そうゆう怨念とか恨みが消えてしまうから。そういうナーマ・ルーパで、これは消えないんですよ。ナーマ、ブワァァァァァーッと永遠にその蓄積されていく。蓄積されていくというよりもね、結局ブラックホールなんですよ。永遠にもう無限大に吸収してしまうわけで。それで消えない。結局ね、ブラックホールのところに、今のサイエンティスト（科学者）がちゃんと説明できています。この魔法瓶をブワァァァァァーッとブラックホールのところに入れるでしょ。消えるでしょう。ではないんですよ。そこに、すべてのインフォメーションがあるから、全くそれを再現できるわけなんですよ。同じものが。

だから、さっき言った「無だ、無だ」なんて言う人がいるけれども、「本当に無が分かっているのか」と、これは体験で分かるしかない。もっと言えば、ただ頭では無駄なんで、ゼロも誰も説明できないんだから。だから、永遠の体験が永遠に残っていくわけなんですよ。これが sandhāvissam (サンダーヴィッサン)。累々と輪廻し続けていっているという、その本源は何か？ ということ、今ずーっとやっているわけなんですよ。その逆をどうして消していくか。ということ、その真ん中で分かったわけなんですよ、ずーっと説明するように。それで、最後に一切を消して、今度はすべてを救う涅槃の世界に行ける、ということ。

¹ 水源禅師一行が2011年10月、台湾仏教見学旅行で立ち寄られた、パオ僧院の南伝寺院浄楽禅寺で頂いた『巴利課誦』『仏陀開悟後の省察』縁起次第（中夜）を引用。
『水源禅師法話集』16巻・14頁以下参照。

はっきり観たと。そのときには、その暗黒が完全に消えて太陽が昇るようだった、というふうなのが最終段階。それをお釈迦様がこのお経の最初に観て、どういうふうに見て、どういうふうにして、この法を使って人を救うかということの過去無量の時間帯を通して現場ですね。現場体験の集積された知識がここにある。

方便

だから、神があなたを創ったから、ここに存在して神の意志で生まれて、そういうことはありません。だから、神は三つの子を癌ですぐ殺す。あるいは98歳のおじいちゃんが28歳のストリッパーの方に3000億のお金を残して死ぬ。神はこういうふうなのが神なのか？ 創るからね。回答できない。それも一代の人生しかない。おかしいじゃないか？ お釈迦様はそうではない。これはすべてあなた方が作り上げています。この映像、この社会。こうして生きています。だから一人一人、これを観たときに完全に救われます。だから、禅を静かにやってください。大平安が待って。ということをはっきりこの中で観ていくと。ここから発して、いろいろなお経が出ております。八万四千の法とかね、『清浄道論』とか、それを詳しく分析した。そして、どうして皆様を連れていくか。

だから、お釈迦様はこの中で「方便」、やっぱり結局「方便」と言えば「南無阿弥陀仏」それもよし。私の使った方便で結局、過去を觀せ、それもよし。『清浄道論』で行くのもよろしい。『清浄道論』なら今現状の日本社会では無理です。時間がない。時間的にやらせてくれない。かといってお坊さんになっちゃったって、やらせてくれない。お寺を持たなきゃいけないし、それを守らないといけないし。そういう状況ではない。それで私が旅を旅を続けた結果が、やっぱり方便で、作ってやって時間があれば『清浄道論』で行くのもよろしいでしょ。私は何も否定しない。

でなければ、このすばらしい法にふれる時間、これはもう二度と一億年、百億年、一千、億千万劫、いつの日にもまたこういうふうに出遇えるかと。これは私らがこのお釈迦様の法のごとく、すごいことなんですよ、これ、本等にその体験してみれば。ずーっとしてみれば。まあまあまあまあまあ一、もう口では言えません。もうこの地球くらいが見えないくらいのことなの。この薄っぺらいの。薄っぺらいこの数ページの中で含まれています。だから結局、私が言うように、アナパナ（入出息念）とか『俱舍論』とか、こういうことを読んでもしゃー、まずこれを読んで覚えてやろうとすれば、「数息觀」、息を入れて息を出していくと、詳しく書いてあるけれども、結局、体験のない、実体・体験のないことでやっているもんだから、結局、作文で終わってしまうんですよ。

今の最高の最悪の事態は作文社会なんです。 「高校で1番とって、すごい、この人は優秀だ天才だ」と言ってさ、オバマとヒラリークリントンが、現場知らないわけなんです、現場。だから文章でそのとおりだと。日本の活動家もほとんどそうでしょ。現場知らないから結局「あーだ、こーだ」となってしまって結局、結果的には弱いものいじめで、本当は政治というのは弱いものを助けて悪をなくすのが政治なんです。全くその逆なんです。作文で

正しく書いて、間違いないけれども、実行できない状態。現場と全然違うことを書いて。それでも「おーそうかそうか」というふうにしてしまっている。まずこの中で皆さん、まず家をつくったことがないでしょう。ほんの少数の人だけが、結局パイプで水道管とかやったことがあるかもわからない。また配電もそうです。コンクリートをこねて道をつくるとか、それから結局、畑を耕して作物をつくったとか。ほとんどその現場の手段を失われているものだから、ほとんどの人が、もうほとんど化かされる状態になっていますね。

だから結局、じゃあ会社やめて山で生きる。どうして生きていきますか？ 猿みたいに木の実を拾って、まーほとんど不可能です。というふうに政治というのは「優しくて人をいかに生かすか」と。「いかにすべてを生かしてく」、「人をいかにチェッカー、殺すかじゃない」、お金もかからない。老人ホームというところに入れてお医者さん付けて、そんなこと外見りやすぐ分かるし、話せばすぐ「病気だね」って、「ちょっとこの薬を飲めばすぐ治るよ」って。一緒に歩けばね、あの一膝も痛くないし。それをわざわざすべてからめてからめて身動きできないようにしてしまう。結局、若い方々は会社で働かないと生きていけないから、もうお父さんとお母さんを診られないし。心痛いだろうけれども、そういう仕組みにさせてしまっ。今度お父さんお母さんは誰もいないから苦しい。老人ホームに入ると、今度、税金でそれをやると。本当にこれこそ幼稚園でも分かることをまじめに、日本の最高の頭脳という人が本気でやっちゃうからね。実はこうだから。

年金払わないのは、ばっさりと！そんな無茶な！払えない人がいるんだから。真面目に働いた人から、もっと取り上げると。ないもんだから。だから結局、消費税 10%！この日本つぶすよ！私はカナダにいて 30 年前やったわけだ、同じこと。今でもこうなの。全世界の借金を日本が払うということなんですよ、これ。TPP も結局、全部の太平洋の借金を全部払って肩代わりして私たちもっと働きます！ということなんです、これ。なんで働かないといけないのですか？ 働かないわけではないですよ。いや素晴らしいことなんです。これ。どこを見ても素晴らしい。でもね、私の友人に言ったわけなんですよ！「お前ね、病院を大きくしても体を壊して何になるの？何でもほどほどにした方がいいよ！」、「うん」。

実は、今は韓国とかみんな連れて韓国にちょっと 3 日遊びに行っている。もう上から下からも、政治家から、政治家なんて結局、作文で頭もいいし。でも勉強する暇がないんですよ。一般の人も会社で勉強する暇がない。せめてヨーロッパ並みに 1 カ月休暇が与えられたら、日本の方々も、もう少し遊ぶ人もいるだろうけど、それはそれで一個、本当に生きようとする人はすごい幸運を受けるでしょうね。あっちのお寺に行って坐ってみたりとかね。お金かからないですよ。あっちのお宮ですーっと坐ってみたり。お金かからない。というのは。日本の先代は千年、二千年は一生懸命、山とかお寺を回っているから。ただ「ありがとうございます」。これでいいわけなんだから。だから日本はいいことがあります。こういう素晴らしい希望があります。

でも「それを教えてくれない」というところが問題だと。結局、あらまあ、坐禅するにはこういうこと、真言宗の方から呼ばれてこうなのかと。これは開けてみたらできないようになっています。このまあ最初のインド仏教が中国に来たとき、テーラワーダ（南伝）の前に達

磨大師が持ってきたんだけど、ブッダゴーサは400年代で、その前なんだけど、直接来た本家本元がやっぱりアナパナ。ナールンダ大学とか、これ読んでもやっぱり解説してあげないといけないのだけれど、まさに私がやったこと全部、書いてます。やっぱり、ここでも「方便」と『清浄道論』があつて二つと。

ところが、テーラワーダの方たちは「いやいやいやいや、『清浄道論』だけしかダメ。この本家本元が、お釈迦様が言っています」と書いてある。それで、ニミッタ（丹光、禅相）のことも書いています。ということは日本のお坊さん方はこれを見ているんですね。見ているけれども、訳が分からないから、こういうふうになってしまう。それで、本が1冊1万5百円とか、10万円すぐかかっちゃう。それで分かればいいんだけど、分かるわけないことを結局あっちの文献、あっちの大学、偉い先生が書いているから一般の人はますます迷って。結局、法から離れてしまう。

大切なことは、やっぱり「人を助け合う」。結局、メッタ（慈悲）ね。西洋社会では「愛」、「ラブ」、まあどうでもいいんですよ、政治家は。皆さんがお互いに助け合って、平穏無事でこうして心を磨いていける社会であれば、それこそ素晴らしいと思います。それを実践しようとしているのが、ブータンのハピネス・インデックス（幸福度指数）。今どのへんにあるか分からないけれど、その数字全部、書かれるから、でもまあ方向は間違いない。だから、皆さんが「チベットの人は弾圧されて不幸だ不幸だ」とか言っているけど、私は山奥の奥、奥に行ったら、まあ、奥の方で煙を上げて、ヤクは自然に自分で草を食って、羊は歩いて、まあ主人はお経を読んでいるんですね。えさは一人で食ってくるし、弥勒菩薩を拝むしさ、お経を読んで、ここ最高ですよ。4000m、5000mのところ。トイレだって、すーっと行ってぽっとして終わりですよ。山の栄養になって草が生えてくるし、まあそれこそ生きて、その心の進化という最高のところに生まれていますね。やっぱり3000、4000mは違います。私もクスコの3000mで経典を読んだら、まあなかなか。トロントのゼロ海拔では、なんだか雑念が入って、なかなかうまくいかないけど、3000mだと、すごすご入ってくるんです。あら一気が付かなかつたって。

分かるでしょ。頭も電波がいっぱい当たるとおかしくなってしまうけれども、セルフフォンね。そういうことで、一昨年「シュンガイトで付けたら、お金も大したことないから付けてください」と。今はっきり論文で出ていますよ。やっぱり（電波で）焼けるらしいですよ。だから、今こうして付けてみたり、それでもね、心臓とか、そういう器具を入れた人は近くにいただけで影響を受けますから。やっぱり飛行機の中でも「コンピュータ切ってください！セルフフォン切ってください」と、非常に強烈なんですよ！飛行機ですら。だから、ある先生には「（シュンガイト）付けてください」と、分かるから。一般の人は「嘘だろ」と思うから付けない。せめて自分は守ってくださいね。ここ（頭）やられるとぼけが早い。忘れやすい。年いけばますます。

特に30年前はマイクロウェーブとか、今は地上でハイデフィニション（高精細度ビデオ）なんとか、強烈なもの発射しているから、関係ないのですよ。皆さんがちょうど働いて、機械のごとく生産して、パッと死んでくれればそれでいいわけなんですよ。生産したものが全

部、国に入ってくる、それでいいわけなんです。そういう仕組みとしか思われたい。(電波で) ぶつぶつ焼けるのですよ、結局、発射しているから。だから、ヨーロッパの方ではちゃんと規則があって、電磁波ここまで 89 とか。カナダはアメリカ全然ないから 150~200 発射して、やっぱり見たらそういうところで、電波の通り道がある。私には見えないでしょ。どうもおかしいなって家を測って見たら、電波の通り道がはっきり分かって、家の中は何かおかしかった。

日本なんて、そういう情報が全然分からないし発表していないから。ま、よいのは風呂ね。あれはなかなか。これが秘訣じゃないかな。そういうことですから、皆さん後ろにシュンガイト少しありますから、これもいつまで続くか、もうこれでおしまいですから。必要と思ったら、放射能まだまだあるみたいですし。皆さんの身は自分で守るように研究して、善いか悪いか全部、実証して、一日でも長く生きる、その中で「いかに心を進化するか」ということをされたら間違いないと思います。

色即是空

禅というのは坐るだけではありません。立ってもできます。歩いてもできます。寝てもできます。そのやり方が結局、基本はアナパナ(入出息念)。アナパナがうまくできない場合は数息観とか、いろんな方法を今まで教えてきましたけれども、やっぱり心を静かに安定して観ると。観られる。そのうち、それをやれば必ずやニミッタ(丹光、禅相)が出てきます。ニミッタの使い方もちゃんとあります。『清浄道論』でいけば6時間続けて(ニミッタを)出さないといけない。その時間ないでしょ? 私はたまたま普段から35年、坐禅していたから、そういう状況に発生したけれども、まあいろんな神様からもらったかもしれませんよ。寺参り、寺参り、どこまで行っても寺参り。精霊たちからのご褒美があったかもしれないけど、普通の人は、私は本当にどうしようかと思ったんだけど。私だけ分かって、皆さんに教えてあげなければ。

「観自在」、ヴィパッサナー(観)の「五自在」を使って観るといふ。初めて分かったからね、実体験して。ここにちゃんと書いてある。『般若心経』の極意が、この『達摩多羅禅経』に。だから『般若心経』はこれは間違いない。実に間違っていなかった。どっちも書いてある。だから「色即是空、空即是色」、これも間違っていなかった。「色即仏」とちゃんと書いてある。「仏即空」。または「仏即色」。一切は仏性となるからね。

だから、こういうふうに、結局これもね、私がいくら言っても、ちょっと無駄なこともあります。それよりも5分でもいいです、1分でもいいです。だから、寝る前に布団の上でちゃっと坐ってね、呼吸をただ観て、ぼんと寝てもそれでいいです。1分が2分になります。2分が15分になります。そういうふうに、カナダでは教えています。「先生できない!」、「いや1分座りなさい!」、「先生、実は15分座りました!」、そうなるんですよ。

結局、今まで「疲れた、疲れた、」、疲れがないんです。やっぱり身心共になっていますからね。私が言うのは心の進化。宇宙は心の進化そのもの以外ではない、ということが私は分かりました。仏性そのものです。そういう中の決め手になるのが「一心」ということです。

スポーツやっても「心が一つ」にしたときに成果がでできますね。オリンピックでも、華道にしろ、茶道にしろ、何か見える。その最高の境地が、やっぱりお釈迦様の教えた「ここを観なさいよ！」と、お釈迦様が言う。さっき言ったみたいに。でなければ、またくるくるくるくるくる回る。どんな栄華をもっても、どんな有名スターになっても、結局マイケル・ジャクソンみたいに、結局、サーッと消え去る。どんな名声でも彼は天国には行けない。ニッバーナ（涅槃）にも達しない。そういうことです。はい。



忍野合宿所にて（2012年9月16日）

水源禪師法話集 15
(2012年9月22日 東京法話会)

2014年10月2日 発行

編集兼発行 一乗会